

メシアの棄却と終末論的希望

詩編 89:39-53

10-38 節「メシアの選びと祝福」の箇所後に、「しかし、今！」で詩編 89 は劇的展開を見せ、「メシアの棄却」の箇所が続く。裏切られ、棄てられたイエスの十字架の孤独、絶望を心に刻み、詩編には描かれていないが、終末論的希望をキリストの復活信仰の光のもとに考えてみよう。

1. 神はメシアを見捨てられた (39~41 節の中の、44~46 節)

一般的に言っても「栄枯盛衰」というように、人は歴史・世界の変化の荒波の中にもまれて生きている。この詩の場合、北イスラエル王国の滅亡に加えて、ダビデ王国 (南ユダ) の命運が尽きてしまったかのように思える出来事の中で書かれ、歌われたのであろうか。イスラエルにおいては、神から油注がれた職務として祭司 (神の人との祭儀的仲介)、預言者 (神の言葉を通しての神と人倫の道の指し示し)、王 (神と人との政治的義と平和実現の仲介) の三職務があるが、実際ダビデ王朝は途絶えたように思えた。当時、王が直面する悲劇はダビデ契約への王たちの不従順への神の罰と見なされていたが、それは単なる罰を超えているように感じられたほど悲惨であった。イスラエル「王国」？にとっていかなる希望があるのだろうか？「しかしあなたは、御自ら油を注がれた人に対して/激しく怒り、彼を退け、見捨て/あなたの僕への契約を破棄し/彼の王冠を地になげうって汚し/彼の防壁をことごとく破り/砦をすべて廃墟とされた。」(39~42 節) 否定的な強い動詞が立て続けに登場する。あなたは拒絶した (悪臭を放つ、そこから、拒絶すること)、拒絶し軽蔑する、怒り狂ったあなたが油注いだ者 (məšīhekā 単数) を。あなたはあなたの僕とのあの契約を廃棄された、あなたは汚した (祭儀的に開かれ、この世にまみれることから「汚す、穢れた」という意味になる)。「地の上に」彼の王冠を (投げ捨てて)。あなたは彼のすべての防壁を破った、あなたは彼の砦を廃墟とした。ここでは松見の予想に反して「アーザーブ」(十字架でのイエスの叫び) は用いられていない。詩編 22:2 参照

あいだに、周囲の人々の嘲りや略奪行為を嘆く 2 節が入るが、44 節から 46 節まで再び神がダビデ家の王を救い出さなかったことが嘆かれている。「しかも、彼の剣を再び岩のかけらとし/戦いの時にも、彼の力を興してくださらない。あなたは彼の清さを取り去り/彼の王座を地になげうたれた。あなたは彼の若さの日を短くし/恥で彼を覆われた。」剣は闘いの中で折れて岩のかけらのようになり、戦いの中で神は油注がれた彼に力を与えず、

祭儀的あるいは人格的清さを失わせ、40節の「王冠」に続いて、ここでは「王座」を地になげ棄てるようにされた。力を象徴する青壮年期は長く続かず、短命の王が続く。王は無力という恥で覆われた。「若さの日」とは何歳から何歳までを意味するのであろうか？

2. 周囲の人々の侮りと略奪行為（42-43節）

攻めてくる敵との戦いだけでなく、通りかかる者たちが単に傍観者としてではなく、「落ち武者狩り」のように、刀や槍、鎧、兜などを奪い、逃げた農民の家に押し入り略奪をするのであろう。周囲の民もメシアを侮る。あのイエスの十字架の周囲にいてイエスを侮った人たちのように。こうしてメシアは戦いに敗れただけでなく、棄てられ、侮られ、孤独の中にいる。

3. 主よ、いつまでですか？（47-49節）

主なる神と油注がれたメシアの間の距離は時間軸で言えば「いつまで？」と嘆かれるような「距離」があり、空間距離としては「どこに行ってしまったのでしょうか？」（50節）と叫ばせる。

神とは誰であるのか（Who）、神とは何であるのか（What）だけではなく、不条理、理不尽な出来事の中で、いつまで（How long）と共に「どこに」（Where）神はおられるのかと人は問うのである。主は「隠れておられるように」（47節）感じられ、遠い存在である。神の怒りは火のように燃え上がっているように感じられ、それは永遠に続くように予想される。

そのような神との距離を感じながら、信仰者は「心に留めてください」（ザカール）「私に」あるいは「私を」と叫ぶ。「いつまで」（How long）と対になって人の一生がいかに「短いものか」（How short）、被造物としての人がいかに空しいものであるかをみ心に留めて下さいと祈る。孤独と絶望の中でも祈りがあり、祈りは神に向かう。命を与えられて生きる人は命を絶たれる時がある。死こそもっとも確実な人の運命である。死後に一時期彷徨う「陰府」の手から魂を救い出さうと訴える。もうその時は遅すぎると嘆願するものである。

4. 主は何処に？（50-52節）

厳密には、主なる神がどこにおられるかではなく、あなたの慈しみ（ヘセド）は、ダビデへの「あなたの誓い」（アーメン）はどこに行ってしまったかと問いかける。ここで再び、主よ、「御心に留めて下さい」（ゼコール）という懇願が生じている。いつまでであろうと、どこにおられるか分からなくとも信仰者は、主なる神が自分の存在と自分の事情とを「記憶しておられること」「自覚して下さっていること」を願い、また、確信す

る。ここでは、「あなたの僕が辱めを受けていること、敵対者の圧力に耐えている自分を（人びとのあらゆる攻撃を私の懐に抱えていること）」心に刻んで記憶して下さいと祈っている。「人間は自分の考えでは、約束と現実の分裂をどうにもうまく繕えない。彼は心に深い傷を受けながらその事実を確認し、その悩みを祈りに合わせた手で神のみ前に持って行き、自分の考えや理由付けではもはや解けない問いを神に発しうるだけである。」（A.ヴァイザー 334 頁）

5. 主をたたえよ、とこしえに。アーメン、アーメン（53 節）

絶望で終わるようなこの詩の末尾として、さらに、詩編第三卷の末尾として、それにもかかわらず、「主をたたえよ、とこしえに」（ここでは、ハレルヤではなく、bārūk, Yahweh であり、主を祝福せよ、主を喜べ、とこしえに (lə'ōwlām)) で終わり、たぶん、会衆が「アーメン」で応唱する。

神の恵みは弱さの中に現れると言うパウロ神学、共観福音書の十字架の神学の暗黙裡の先取りであろうか?! それにしても詩編 89 編は展開が数カ所で 180 度変わる歌である。それが私たちの人生なのであるか!